

■□ 開会挨拶

若林 靖永（くらしと協同の研究所 理事長）



くらしと協同の研究所の理事長をしております若林靖永です。

まず個人的な事情ですが、この4月から、京都大学を退職して佛教大学社会学部公共政策学科に異動いたしました。リフレッシュした気持ちになり、毎日、楽しくやっています。

そんなことは、おいとしまして、本当に今日、皆さんとこんなふうにお会いできて、とてもうれしく思っています。くらしと協同の研究所にとって最も重要なメインイベントであり、そのときどきの暮らしや地域や協同組合の問題を取り上げて、互いに学んで、そして未来に向けて頑張ろうというような場として取り組んできた、この総会記念シンポジウム。コロナの状況のなかで、この2年にあたってはオンラインということで、こんなふうリアルに集まるということができませんでした。コロナは現在まだ大きく増加傾向ですので、今夏どうなるか心配ではありますが、あまり心配しすぎてオンライン開催とするのも、学びのリアルの場の意義からするとどうか、というように考え、主催者として、今回の総会記念シンポジウムはリアルとオンラインのハイブリッド開催とすることを判断いたしました。本日は会場に50名ほど、オンラインで70名ほど、合計120名の方々が参加されています。ぜひ、リアルの場で学び合うということを大事に味わってほしいと思います。昔はそれしか選択肢がありませんでしたので、それが当たり前でしたけども。やっぱり、なくなってこそわかるありがた

み、リアルで学ぶこと、リアルで人と議論し合うこと。リアルで感じるものがこれからの礎にもなるんだろうと思います。

今回の総会記念シンポジウムは第30回の総会です。くらしの協同の研究所も30年という長い歴史を持つようになっています。これまでのくらしと協同の研究所について振り返り、未来に向けてどう貢献していくか、考えていきたいと思います。

今日のテーマは、労働者協同組合です。労働者協同組合のテーマは、協同組合運動のなかでは、古くて新しいテーマです。国際的にはさまざまな労働者協同組合が展開されており、日本でもワーカーズコレクティブなどの取り組みが各地ですすめられてきました。しかしながら日本では各種の協同組合それぞれの法制化が行われていて、労働者協同組合に対応する法がないこともあり、さまざまな事業展開の障害、社会的認知の課題がありました。そしてようやくにして、地域社会での雇用創出等のために、労働者協同組合についての法制化が成立しました。「協同労働」とはなにかということそのものが実践的な問いでもあり、労働者協同組合が、これからの21世紀の社会を考えていく上で、協同組合運動においてどういう意味があるのか、どういうビジョンを切り拓くのか、本日は考える機会になればと思います。各地域での労働者協同組合の取り組みに学び、これからの地域とか、これからの私たちの働き方とか、これからの社会ということを展望していく機会としてください。